

7 2個の磁石玩具の誤飲により3か所の小腸—小腸瘻および腸閉塞を来した幼児例

村田 大樹・内山 昌則・額賀 俊介*

県立中央病院 小児外科
同 小児科*

磁石がついた玩具の誤飲により3か所の小腸穿孔・小腸瘻形成をきたした例を手術治療した。

症例は1歳11か月の男児で、前日の夕方から嘔吐と腹痛があり、当院救急外来で点滴治療を受け帰宅した。その後も症状が続き翌朝近くの小児科医を受診し、制吐剤と整腸剤を処方された。しかし嘔吐は2時間毎となり午後に当院小児科を受診した。活気がなく脱水がみられ、腹部は右上腹部に圧痛および筋性防御と反跳痛を認めた。白血球増加あり、腹部X線・CT所見で鏡面像と腸管拡張がみられ、さらに4×5mm大の異物を二つ認め重なった磁石と考えられた。腸閉塞および消化管穿孔・腹膜炎と考え緊急手術を施行した。小腸—小腸瘻を3か所に認め、一番肛門側の小腸瘻の相互の小腸内に各1個の異物を認めた。癒着を剥離し腸閉塞を解除し、3か所の小腸瘻を切離してできた6か所の小腸穿孔部をそれぞれ縫合閉鎖した。異物はキャラクターの頭部で磁石が埋め込まれていた。術後低蛋白血症であったが食事により回復し、術後14日目に退院となった。

8 肥厚性幽門狭窄症にヒルシュスプルング病を合併していた乳児例—診断までの問題点—

金田 聡・広田 雅行・内藤万砂文

長岡赤十字病院 小児外科

昨今、ヒューマンエラーの見地からエラーに関係する人間の特性に関する分析が散見される。本症例は診断に至るまで反省すべき点が多々あり、振り返ってみると「エラーに関係する人間の特性」とはこういうものかと考えさせられた。

症例は1ヶ月HPSの女児。前医でアトロピン療法を施行したところ有効で一旦退院となったが、数日後に嘔吐が再出現したため、再発と考え

られ当科に紹介された。エコーで確認後にRamstedt手術を行ったが、幽門部の肥厚は軽度であった。術後も嘔吐が継続したため、上部・下部造影検査をおこなったところH病の診断となった。診断までの経過を振り返るとHPSに否定的なでき事もあったが、「HPSの再発」との先入観に引きずられ、結果的に回り道になってしまった。

9 救命できなかった十二指腸潰瘍の1例

近藤 公男・大澤 義弘

太田西ノ内病院 小児外科

症例は3歳、男児。1週間前より胃腸炎様症状あり、近医で輸液等の治療を受けていた。3日前より食思不振あり。当日患児がぐったりしているのを母親が発見し、救急車を要請。救急隊到着時心肺停止状態で、心肺蘇生処置をしながら当院到着した。著明な貧血(Hb値3g/dl)を認め、吐下血はなかったが、消化管出血を疑い、緊急内視鏡を施行、十二指腸球部前壁に穿孔性潰瘍を認めた。輸血、保存的療法を行ったが、腹水貯留による腹満が著明になり、大網充填術、腹腔ドレナージの目的で翌日開腹した。十二指腸球部前壁に径2cm大の穿孔あり、更に潰瘍底付近より動脈性出血あり、止血をかねて潰瘍部を縫合閉鎖した。術後も出血を繰り返し、入院3日目に出血性ショックで死亡した。

10 下肢静脈瘤に対する血管内レーザー焼灼術

羽賀 学

羽賀心臓血管外科クリニック

下肢静脈瘤に対する血管内レーザー焼灼術は平成23年1月から保険適応となり、低侵襲で日帰り手術が可能で広く普及するものと期待されている。当クリニックでは、県内で初めて静脈瘤に対するレーザー治療を導入し、平成24年2月末現在で約200例の手術を手がけている。手